
病弱な異常者

餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病弱な異常者

【Nコード】

N0911V

【作者名】

餓鬼

【あらすじ】

この物語は原作の設定を少し弄るだけで転生物ではありませんのであしからず。

この小説は誤字があったりしましたのでご了承下さいm(_____)m
率直な意見を書いてもらえると嬉しいです、参考に致しますので

キャラ設定（前書き）

ノリでやっちゃまった

キャラ設定

名前…黒井くろい 影斗かげと

身長…古賀より少し高い

容姿…男だが見た目が女の子に見える、例えるのならカッコイイ女の子

髪は腰まで伸びている。

そして、容姿のせいで真黒を苦手としている。

異常…
ゴースト
幽霊

能力…姿が見えない、攻撃が当たらなくなる（自分の攻撃は当たる）
詐欺師（ペテン師）

能力…一度見た相手の戦闘スタイルを100%真似できる

過負荷

永遠の病魔
エタernalデッシーズ

能力…相手または自分に色んな病気を発症させることができるしかし、コントロールが難しい為全て自分の元に来る。

経歴

小学校卒業まで古賀いたみとは幼馴染み、中学に入る前に親の都合で引っ越し中学では球磨川と知り合い生徒会に入るその際に安心院さんに異常と過負荷を交換された。

めだかと人吉とは友達でめだかとは真黒さん繋がり親友、そして箱庭学園に入学と共に日之影に「お前は危険だ」と言う理由で襲われめだかが生徒会長に主任した日に復学、クラスは一年一組だよ

第1箱（前書き）

ミスがあつたので書き直しました。

第1箱

『世界は平凡か？』

ゲホゲホ

『未来は退屈か？』

ゲホゲホ

『現実 is 適当か？』

ゲホゲホ

「安心しろそれでも生きることは劇的だ！」

ゲホゲホ

『そんなわけで本日よりこの私が、貴様達の生徒会長だ！』

学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい。

24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける！！』

——壺ノ1

「ねえ聞いた？ 新しい生徒会長の噂」

「私達と同じ入学したての一年生のくせに、冗談みたいに態度エルな奴なんだって」

「引くほど美人なんだけど、やることなすこと無茶苦茶に型破りでさ、先生もビビって手エ出せないそうだぜ」

「しかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ

人前に立つのに慣れてるっつかさー♪」

「カッ！ ありゃあ人の前に慣れてんじゃねーよ、人の上に立つのに慣れてんだ！」

「まあ、そーでないと一年で生徒会長にはなれないからね」

「そりゃそーだよねー♪しかも支持率98%！ぶっちぎりのナンバーワンだもんねー」

「僕らも一票入れたしね、で？ 善吉はどうするの？」

「どうするって？」

「生徒会に入るんだろ？」

「カッ！なわけねーだろ！これ以上あいつに振り回されてたまるかっての！」

「僕も誘われたんだけどね」

「ああ、俺は絶対！生徒会には入らない！！」

善吉、後ろに御注意下さい。

「まあ、そうつれないものを言うものではないぞ善吉よ」

「頑張れ、善吉」

「貴様もだぞ影斗よ」

……まじですか？

「ギャアアアアア……」

——生徒会室

「……ったく

普通に連れてくってことができねーのかよ生徒会長さん」

善吉、お前はまだまだ僕なんてマフラー掴まれ……死にかけてたんだぞ。

僕このまま寝るよ！ 後は任せたよ善吉

———剣道場

「ケホケホ」

「大丈夫か？ 影斗」

「ムリ、タバコ臭い」

「それにしてもお前、病弱だな」

「伊達に一年間病気になってるからね」

それにしても、めだちゃん無刀取りをするなんて、一様覚えておこうかな？ 生徒会で役たつかな？

「まずは素振り1000回からだ！

貴様達、今日は歩いて帰れると思うなよ！！」

「僕もかなめだかちゃん」

「当たり前だ」

海外に居る父さん、母さん、僕、今日死にます！

第2箱（前書き）

意外な展開を作ってみました

第2箱

――翌日

「食堂にいこうぜ、影斗」

「今の姿を見て僕が動けると思うか？」

そう、昨日の件で僕の体は筋肉痛でボロボロなんだよそれなのに僕に動けと言うのか？

「すまん！」

「僕、寝るから」

僕の意識は別の所に刈り取られた。

「やあ、影斗君」

「馴れ馴れしく名で呼ぶな、安心院^{あじむ}」

「何時ものキャラと違うよ」

「なら、俺の異常を返せ」

「嫌だね」

それから僕のこととは親しみを込めて安心院^{あんしんいん}さんと呼びなさい」

コイツのせいで俺の異常と過負荷は交換された。

「酷いなあ、安心院さんは

なら、僕は諦めるよ」

「何時か必要になったら返してあげるよ」

「なら、俺を呼ぶ必要ないんじゃないか？」

「僕と君が喋るのに理由がいるの？」

そう言いながらどんどん距離を縮めてきた。

「近い」

「わざとだよ」

「時間だな」

「もっと、話したかったな」

俺の意識は元に戻った。

「今、何時？」

気がつくと放課後になっていた。

「急いで行かないと」

僕は急いで剣道場に向かった。

「……ま…待てよ…」

剣道場を覗くと門司さん達がボロボロになりながら喋り出した。

「勝手なこと吠えてんじゃねえよ」

たった今思い出したわ

俺は昔剣道少年だったんだよ!!」

「あー俺もそうだった」

「そーいや俺も」

「俺も」

「俺なんか日本一の剣士目指してた

気がする」

これは早い改心だったな。

よし、助けよう!

「剣道三倍段って知ってるか!？」

僕はあんたら3倍強いって意味だ!!」

「!？」

「くっ…黒井」

「無刀取り成功♪」

「なっ…なんだと」

「善吉、交代」

僕は後ろにいた善吉とハイタッチをし交代をした。

「大丈夫ですか? 先輩方」

「何で俺たちを助けたんだ?」

そんなもの簡単なことさ。

「僕は努力する人が好きなだけです」

これは嘘、僕は負ける側の味方だけ。

「善吉、帰ろうか」

「おう！」

――翌日、生徒会室

「善吉居るか？」

僕が扉を開けた時珍しい物を見た。

「ありがとうっ！！」

「良かったな、善吉」

「影斗も入るんだろ」

「入る「ありがとうっ」ウゲ！」

言い切る前に抱きつかれ体にダメージが

「僕は副会長なんだ」

ちなみに善吉は庶務だよ。

ここで生徒会の設定を話します

庶務1名

書記1名

会計1名

副会長2名

会長1名

こんな感じに変わっていますのであしからず。

第3箱（前書き）

急展開がまっていますよ

第3箱

「何してるの善吉」

「影斗かやっぱり俺には黒い制服似合わねーよ」

僕はマフラーつけているだけで余り変わらない。

「だから制服白のこのガッコ来たってのに…」

「いや

そんなことはない

善吉には黒が良く似合う」

「どうわっ！」

だからお前はなんでいつもいきなり後ろにいるんだよ!!」

「見てくれが気になるのなら内側にジャージでも着てみたらどうだ？
きつと格好よいであろう」

そのセンスどうかと思うよ。

「？」

何バカなことを…」

それでも着るんだね

「つてうわなんだコレ!？」

デッデビルかけえ!!」

嘘だろ! 嘘だと言ってくれ善吉!

「目安箱をチェックしてきたぞ」

「では、生徒会を執行しよう」

ケホケホ、今日は大丈夫だろう

「ふむ…どうやら今回はきちんと記名しておるようだな」

二年生の相談か、やっぱり上級生は大変なんだな

「あの…ごめんなさい」

本当はこんなこと下級生のあなた達に相談するようなことじゃないかもしれないんだけど

剣道場のこととか友達から色々聞いて…」

「遠慮はいらん構えるな

私は誰の相談でも受けつける」

年上にその態度はないと思うよ

(なんでこいつ上級生に敬語使わないんだろう…)

(なんでこのコ制服の下にジャージ着てるんだろう…)

(あっちのコはマフラー着けてるんだろう…)

「ケホケホ」

「大丈夫か影斗」

「今日はムリ、そして何日間か休むから」

生徒会室から出たのはいいけど結構しんどいんだよね。

「どうしたの、黒井」

「不知火こそどうしたの？」

「おじいちゃんが黒井のこと呼んでたよ」

「そうですか、わかりました」

———理事長室

「何の用ですか？」

「崩してもらってもいいですよ」

本当にこのキャラ疲れるんだよね、それに後ろにいる奴等が気になるな

「早くしてくれ、俺は気分が悪いんだ」

「三年前の話覚えてますか」

「フラスコ計画だろ」

「そうです、それでこのサイコロを振って下さい」

八つサイコロが入ったグラスを渡されそれを取り出し振った。

「サイコロ弁償しましょうか？」

サイコロは振った瞬間に粉々になり粉になっていた。

「これほどとはやっぱりあなたは異常です」

「後ろの六人も出てきて下さいよ」

鋭い殺気を放ってみました。

「バレていましたか」

「バレバレですよ（笑）」

後ろから出てきた六人の中に知り合いがいた。

「久しぶり、いたみ先輩」

「影斗君久しぶりだね」

と言いますかあなたは何時異常になったんでしょうね。

「貴様、王に挨拶はないのか」

「だ・ま・れ・殺すぞ♪」

最高の殺気に最高の笑顔のコンボですよ。

知らない先輩方は顔色が悪くなっていった。

「待って下さい黒井君」

「なんでしょ、理事長」

「参加するんですよ、このフラスコ計画に」

「誰かが抜けたら入りますよ」

「ありがとうございます」

「その前に僕は始まりの異常を取りに行く必要ができましたね」

「一様あなたの験体名は『詐欺師』（ペテンシ）と名乗ってもらいます」

「では、誰かが抜けたら連絡下さいそれまで休みますから」

理事長室から出ようとすると包帯を巻いた先輩に絡まれた。

「ちょっと待てよ」

「何ですか？」

振り向いた瞬間に注射器を投げられた、それは俺を透き通り壁に刺さった。

「何！」

「残念でした♪」

そのまま帰りアイツの元に向かった。

第4箱（前書き）

ハイスピードで物語が展開していきますよ

第4箱

「今回は時間がたっぷりあるから話し合いしようか、安心院さん」

「なんでそこまで必死になるの影斗君」

「あれは俺の異常だからな、それに奪われたまま俺が黙ってるわけないよ」

自分のキャラが固定できなくなってきたな、早く取り返したいな。

「もしかして、未来を読んだから」

「正解、三つ目の異常を使って未来を視てな

俺はソイツの異常を守ってやりたいんだ」

「凄い発言したけど、君は過負荷のほうでしょ

ちゃんとした理由を言わないと返さないよ」

ちゃんとした理由かそんなの決まってるが俺が言っているのか？

時間はまだあるが異常を体に馴染ませたい

「俺はただ、自分のたった一つの光を失いたくないだけだ！

俺はその光を守るにはあれしかないんだ！

俺が救われなくてもいい！ だけど俺はあいつを守りたいんだ！！」

「じゃ、第三の異常と交換だね」

そう言って安心院は俺に抱きつき唇を奪われた

「過負荷はまたいずれ返すよ」

「その時は意地悪しずに返してくれよ。」

お前は普通にしてれば可愛いやつなんだから」

「いきなりそんな事言わないでくれ／＼／

次、冷やかしたら究極^{アルテマ}を返してもらうよ」

「じゃあな」

俺はいつものように扉から帰って行った。

「いいなあ、影斗君にあんなに思ってもらえるなんて羨ましいな」

「メールがきてますね」

『雲仙君が抜けたので来て下さい』

これは急がなくてはいけませんね、少し疲れますが走りましょうか

「扉が壊されていますね、真黒さん」

「いつから気づいたのかな影斗君」

「此処に来たときからですが」

「なんで君は着物を来ているんだ」

「私は今回、異常側の人間ですから
では、さようなら」

「消えた！ 彼はそんな事できない筈だ」
消えたのではなく只走っただけです。

——地下3階

そろそろ異常を解きましょう、これはとっておきなので。

「疲れたな」

「影斗君久しぶり」

いきなり後ろから抱きつかれました、誰だかはもう知ってるんだけどな。

「何してるんですか？　いたみ先輩」

「よそよそしいな、昔みたいにいたみて呼んでよ」

「何でお前は着物なんだ」

「これは普段着です」

今の格好は刀語の七実の姿に似ている格好をしています、なぜこんな格好かと言うと究極は見取りに似ているので口調や格好まで真似をするんですよ

「まあ、今日はよろしく頼むぜ」

「喜んで」

今日が副会長最後の仕事ですね、疲れしますが本気でやりますか。

第4箱（後書き）

次からはゆっくりやっていきます（ ∇ 、 ッ ）

第5箱（前書き）

次でフラスコ計画編おわります
終わらせてます

第5箱

「凄いねいたみちゃん

めだかちゃんを倒すとは」

「ありがとね！ 影斗君」

「てか、お前らの関係を教えろよ」

名瀬さんが包帯を巻き終え会話に入ってきた。

「ただの幼馴染みですよ」

その言葉でいたみちゃんが少しがっかりしていた。

「時間もあるので昔話でもしましょうか」

出合いは簡単なものだった。

「古賀さんいつもすみません」

僕の両親は共働きでほとんど家にいないのでいつも隣のいたみちゃんの家に預かってもらっていました。

「いいんですよ、家のいたみと仲良く遊んでるので」

そんな感じですよ、出合いというのは。

「いたみちゃん！ 何して遊ぶ」

「何しようか？ 影斗君」

それがいつもの日常でしたね、ほとんど二人で遊んでいましたね。

「いたみ、中学生になったんだ」

「何それ！ 酷いよ、影斗君」

「やっぱり、いたみと話してる方が楽しいな」

「そうかな／＼／／／」

「そうだ、俺な来年引っ越すんだよ」

「そうなの！」

「安心しろ、俺はいたみのこと忘れないから」

「本当？」

「俺が嘘付いたことあるか」

「コンナ感じですよ」

「古賀ちゃん、応援してやるよ」

「ありがと名瀬ちゃん」

「気がついたようだな」

「何で上だけ脱ぐの？」

意外に筋肉があるんだ、それに肌きれいだな。

「私はあの人のところへ行かなければなりません」

「じゃあ、行くか」

何で、上だけ脱ぐのかそれは俺のときは気分が刀語の七花になるからだ。

「着いたか」

みんなビックリしてるぜ、主にめだかの方だな

「影斗何してるんだ」

「紹介が遅れた。」

俺は生徒会副会長兼『十三組の十三人』詐欺師の黒井影斗だ」

「嘘だろ」

「嘘じゃねえよ、な！ 王土」

殺気を加えて聞いてみる

「……そうだ」

「そう言うことだ！ 後は任せただめだか（改）」

今回の戦闘を全て見取らせてもらうぜ

「いたみ、どっちが勝と思う」

「わからない」

「そりゃあそうだ、あんな戦い誰も止めれないな」

「嘘は止めようぜ」

名瀬がわかったような口振りで言った

「バレたか、あんなもの指二本でとめれる」

これって言ってよかったけ？

「「「「「！！」」」」」」

「今の冗談、腕一本無いと無理だ」

「そつ、そうだよね」

まあ、冗談じゃないけど

「終わったみたいだな」

さて、俺はこの後にある未来を変えるだけだ！

「おい、影斗」

「これいらんから返すは」

俺は腕に付けている腕章をめだかに返した

「お前はそっち側なのか？」

「正解！」

だって俺三年前からこの計画に誘われていたからな」

「「「「「「「「「「「！！」」」」」」」」」」」」

「フラスコ側は驚くなよ、前に話聞いただろ」

「聞いたけど本当だとは思わなかった」

「いたみ、俺って嘘ついたことあるか？」

「ないけど」

「なら、信じろ」

十三階に着いたなじゃそろそろ私の番ですね。

「いや

偉大なる俺には「させませんよ」なに」

都城さんの手が古賀さんの心臓に当たる前に止めさせてはもらいました。

「貴様なにをする」

「何じやありませんよ、他人の異常を取って戦うなんて王ではなく三下のやることですよ」

そのままお腹蹴してもらいました。

「ぐっ…はっ…！」

「では、草むしりの時間ですね」

これまでで一番鋭い殺気をたてたら何なんか戻してましたね、あとでお掃除をしましょうか。

「許してくれ」

「嫌です、貴方は死んで下さい」

手で都城さんを刺そうとした時、黒神さんに止められた

「何すんだめだか」

「それ以上は私が許さん」

「俺と殺るのか？」

「私は影斗を止めてみせる」

「おいおい、死んじやうよ」

「真黒、止めなくていいのか？」

「そうだ、止めるんだめだからちゃん

「今の君じゃあ死に行くものだよ」

「それでも、私」

「しょうがない、俺の異常を教えてやるよ」

俺の異常は究極それは他人の異常を一、二回見ただけで完璧にその異常を使えるんだよ」

[[[[[!]]]]]

「驚いた！ それに、俺はお前の異常も見取らせてもらったよ
それでも殺るのか？」

でも、今のお前等じゃ面白くないから、帰る」

そのままエレベーターに乗り四階に向かった。

なぜ、四階に向かったかと言うとそこに最低な友達がいるからだ。

第6箱（前書き）

過負荷編に入ってきましたよここから主人公の嘘つきが本領発揮します次回から

第6箱

「おいおい、やりすぎだぜ」

「『影斗君久し振りっ』」

「よお、リーダーさん」

「『昔の呼び方でいいよ』 『やっぱり影斗君はこっち側だね』」

俺はずっと昔からそちら側だ

「でも、俺の過負荷はあいつにとられてるんだぜ」

「『大丈夫だよ』 『彼女は絶対に返してくれるよ』」

「なら良いんだが」

空気が変わった誰か来たようだ

「!?」

「……え？」

「何…何これ？」

「『裏の六人』が…全滅…だと？」

「チーム負け犬も…同じく全滅…？」

「一人残らず？」

「なんだこりゃ…なにがあったらこんな光景になるんだ？」

まさか相打ちにでもなったのか？」

さて、挨拶の時間だ禊

「『『いいや』 『相打ちじゃあこうはならないね』』」

「『『十四人全員が同じように串刺しにされている——』』」

「!!」

誰だ！」

「『『おおっと!』 『早とちりしないでおくれ』』」

「その通りだ」

「『僕が来た時にはもうこうなっていたんだよ』 「『だから』』」

「『俺『僕は悪くない』』」

「『めだかちゃん久し振りっ』 『僕だよ』」

「行くぞ！ 禊」

そのまま時計台地下を後にした。

第7箱（前書き）

遅くなり済みません m
┌
└
m

第7箱

――翌日

「面倒だな」

なにが面倒だって、ほらあれだ……ああ言うだけで面倒だからパスで

「何してるんですか？ 影斗さん」

「えっと、江迎だよな」

にして恐いな包丁、刃の方を持ってるよ。

「はいそうです」

「暇だから、一緒にクラス探さねーか？」

「良いですね、なら旧校舎に行きましょう」

話してみると普通、違うまだ、自分が幸せになることを諦めていない子か

「旧校舎に着きましたよ」

「じゃあ行きますか」

部屋に入る時はノックを忘れずに変態が着替えているかもしれないからね。

「失礼しまあーす」

「旧校舎管理人の黒神真黒さんはこちらにおられますかあー？」

「……黒神真黒は僕だけど……？」

「あー！ いたいたよかったあー」

「えーっと私

昨日付けでこの学園に転校してきた者なんですけどおー」

「何せ新設のクラスだから新しく教室を用意しなきゃダメらしいんですよおー」

「だから

この軍艦塔を問答無用で明け渡してもらえますうー？」

「それが嫌なら俺のコレクション全て焼き払えよ」

「何言ってるんだ！ あれは僕の宝なんだ！ 容易く燃やせるわけがない！」

「何度言えば分かるんですか？ 自分は男ですよー」

また変わった、彼に会う度キャラが変わっている、これが異常と過負荷を持った人間の人格なのか？

「違いますよー」

自分はただ面白いからキャラを替えているんですよ」

「！？」

僕の思考を読んだとゆうのか！ いったい何なんだ彼は！

「自分は最強の異常ワイルドと最弱の過負荷オーバーロードを持った人間ですよー」

「それは楽しいかい」

「最悪ですよ

なんて、嘘嘘うつそー冗談ですよー

この生活は楽しいですよ」

バンッ！ 後ろの扉が開いた。

「五月蠅いですよ

お兄様、それ以上五月蠅いとコレクション焼きますよ」

やばいな、五対二は少し江迎には荷が重いな。

「ん」

「江迎、逃げますよ」

「そうですね、さすがにこの五対二は私じゃムリだわ☆」

「即逃げるっ！！」

「「「！？」」」」

これは妥当な判断だったかな。

「ごめんよ、江迎」

「そんな事ありません」

「しょうがない

自分等過負荷は負けるのが前提だからな
疲れたから自分は戻ります」

「わかりました」

さて、自分はこのままアイツに出会わないことを願おう、あの『知られざる英雄』にね、でもあの時恨みはきちんと返さないといけませんね！

第8箱（前書き）

次回は過去のことを書きます
てか今回少し蛾々丸ちゃんとキャラが被りかけました

第8箱

「『ぬるい友情・無駄な努力・むなしい勝利』

『それが僕達マイナス十三組のモットーだよ』」

あらあら、戦闘になってるますね、おつとあそこにいるのは英雄じゃあないですか！ よし、潰しましょう♪

「『さて日之影くん』『三対一ななったけど』『続ける』」 「違
います、四対一ですよ」

「お前はあの時の」

「『なにかあったの？』『影斗君』」

「昔、病院に送られたんです

何もしていませんのに、今なら殺してもいいですよね？

早く逃げてくださいよ、逃げれるのなら？」

異常を使って逃げたよ追いかけてみよう。

「禊、敵を冷やかに行ってきます」

「『迷惑かけないようにしてよ』『じゃないと、面白みが経るから

さあ』」

「了解」

早速、今見取った異常を使いましょうこの『知られざる英雄』を
ね

「日之影空洞？ 誰それ」

途中で見つけるなんて偶然でも出来すぎですよ

「……………！！」

やはり、めだかはあの人に助けを求めましたか
「まあとにかく

その日之影空洞って人に会えばいいんだろ？

わかったよ」

「で、どこにいるんだその先輩は？」

「もう、来てる。」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」」

貴方の顔はむかつく剥いでやりましようかあの顔を

「……………」

「合格」

「不合格」

「合格」

「不合格」

「不合格」

「ギリ合格——ただし故障中」

貴方も不合格ですよ我々の前から逃げた時点だね

「…参ったな別にそこまで高望みしてたつもりはなかったんだが
こりゃあ予想以上に惨憺たる有様だ」

そもそもマイナス十三組を相手にするのが間違いですよ

「断言するぜ黒神」

このメンバーでマイナス十三組に挑むのは格安自殺ツアーを組むよ
うなもんだ」

格安で自殺ですよ安いじゃないですかそれに、楽しいかも知れま
せんよ

「俺はついさっきマイナス十三組と接触してきた

率直に言って『話にならない』というのが奴ら過負荷への感想だ」

「そんな連中に敵対するにあたって

生徒会役員五人中一名が敵側、三名がそろって不合格だなんて問題
外と言っている」

早くお話し終わりませんかね、自分の出番がここだけになってし
まいそうですね

ここは一つ全員の殺し方を考えながら待ってみましょう。

「やります」

「やります」

「やります」

丁度こちらでも考え終わったので姿を出しましょう。

[illegible]

「影斗貴様」

「あなた、本当に影斗君」

「あ、あ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「嘘っだ！」

『影斗君歸つてきて』

『それは謝るよ』

『まとめて片付けるウルトラCだよ』

「お見苦しい所をお見せして済みません、用事ができたので戻らし

携帯を締まって出口に行こうとしたらとめられた。

「何でしょう、急いでいるんですが邪魔をするのなら殺しますよ」

「では、失礼しました」

「?」

「どんなプランができたんですか禊」

「「!」?」

いきなり現れたら仲間でも驚くんですね。

「これを見てよ」

渡されたのは生徒手帳の校則の欄だった。

「これは、なかなか楽しめそうですね」

「でしょー」

「愉快ですね」

「『なるほど』『確かにいい手だ』『いや』『酷い手だ』」

「『これならマイナス十三組が揃うのを待つまでもなく』『明日にだってすべてが台無しだ』」

「『しかし不知火ちゃんこんなえげつなさの極みみたいなことよく思いついたね』」

「『僕正直ちょっと引いてるよ』」

「同感です」

あなた地獄から来た観光客なんじゃないんですか?

「それに本当にいーのかよここまでして」

お前生徒会に友達いるっていったじゃねーか」

「えー」

いますよー

だから試したいんですよ

あいつらがいつまであたしの友達でいられるのか☆」

「さて、自分も動きますか」

「『彼女に会いに行くの』」

「近い内にですがね」

第9箱（前書き）

ごちゃごちゃになったがデキタ！&明日から補習だあああああ！
不幸だあああああああああ！

もしかしたら7月28. 29／8月1. 2. 3はもしかしたらあげ
れない可能性がある！

時間を見つけたら書くので応援して下さいm（　　）m

第9箱

「どうしたんだお母さん、影斗見たときあんなになって」「あなた達には彼の過去を知る権利があるわね」

13年前

「人吉先生」

そろそろ午後の診察を始めていただいてよろしいでしょうか？」

「あ、うんお待ちせ

でも準備できてるからいつでも——」

そこに現れたのは元気な少年だった。

「宜しく願います」

「黒沼悠くんね

よろしくね」

「では、お願いを聞いて下さい」

なに、いきなり不陰気が変わった。

「自分のこと異常なしと診断してくれませんか」

なにこの大人の遣り取りをわかってるような口振りは

「それは、駄目よカルテには嘘は書けないの」

「自分は楽しい時間を使って来ているんですよ」

「あなたは明らかに異常——うんそれ以上のそれ以下の何かよ」

「瞳先生が言ってるのは過負荷のことですか？」

「ま、過負荷？」

「そう、彼女は僕に言いましたそれは異常の反対過負荷です。

過負荷と言うのはそのままの意味ですマイナスの感情から生まれる物です」

「質問いいかしら」

「構いません」

この後、後悔することになった、これを聞かなかったらどれだけ人生が変わったかわからない。

「あなたの環境にマイナスになるものはあるの？」

今のを聞いている限り君はただの異常にしかみえない」

「僕はこの世界に不満を持っています。」

簡単に言うと、異常が嫌いなんですよ、異常は僕と彼女だけでいいんですよだから僕は異常を嫌いになりこの過負荷を手に入れたんです」

その瞬間私の身体の重力が重くなった。

「な、何をしたの？」

「先生の重力を重くしただけですよ」

そして、次の一言で私は折れてしまった。

「取引しませんか？」

フラスコ計画の4割の実験データと」

「!？」

「何で知ってるのて顔ですね」

僕は彼女にいろんな話を聞き自分なりにまとめてみた資料です」

彼はどこからかフロッピーディスクを出した。

「わかりましょね」

私は恐怖に溺れ受け取ってしまった。

「最後にいいかしら」

「なんですか？」

「あなたの遊び友達と話に出てくる彼女は同一人物？」

「違います」

僕の友達は可愛い普通な女の子ですよ

もう一人は夢に出てくる人です、一言で言えば魔女ですね」

彼は帰って行った

「これが影斗君の過去ね」

「な！ あいつは2歳の時にそんなことができたのかよ」

いるかわからないけどそれしか方法がない戦って勝てる相手じゃないしね

「どうしたんです？」

「ここに影斗の幼馴染がいるんだよ」

いける！
彼を幸せ（プラス）にできる

「私です」

「説得ぐらいできるだろ」

「大丈夫、彼は古賀さんの話を聞いてくれるわ」

「古賀さんが影斗君を好きだったらいけるわ」

「わ、私は／＼／＼／＼／」

第10箱（前書き）

補習で忙しいので二部作こうせいです

第10箱

——翌日

「それでは、これより本年度一学期終業式を——開始ふあいひふる。」

「「「「!」」」」

「「「「!」」」」

「『やっほー』『箱庭学園の皆さん』『はじめまして!』」

「『僕は、球磨川禊』『めだかちゃんの元彼でーっす!』」

「『「——というのはもちろん冗談なんですけど』『あはっ!』『今信じた馬鹿、どのくらいいるー?』」

「「…鳥肌の立つような冗談を抜かすな球磨川、危うく卒倒するところだった。このような場で何の用だ、今壇上にあがってよいのは生徒会役員だけだぞ」

「なら、俺は上がってもいいだろ」

「「「「!」」」」

いきなり、姿を現したせいかみんな驚いているな。

「ほら、続けろ禊」「『……………』『生徒会役員』『ねえ』『いやいや、邪魔する気も、卒倒させる気もないんだ』『ただ』『このような場で、めだかちゃんに話しておきたいことがあるんだけどさ』『……………なんだ、それは? ……署名?』」

「『そう』『署名だよ』『めだかちゃんが大好きな』『み(・)ん(・)な(・)の意見って奴だ』」

「『箱庭学園、学校則、第45条第三項に基づき』『生徒会長黒神めだか』『きみに解任リコール請求を宣言する』」

「「!」?」

「え…? リコール? 黒神めだかをっ…?」

この騒動をどうやって解決する、生徒会長様。

「……………阿久根先輩、校則第45条第三項って何ですか…!」?」

「：第45条は生徒会執行部の罷免に関する条目だ。第三項はその詳細」

「『生徒会執行部に明白な不備がある場合——全校生徒の過半数の署名をもって役員は即日罷免される』!」

「不備い? 不備ですって!? そんな馬鹿な!! 俺達に何の不備があるってんですか!!」

「『おいおいとぼけるなよ、善吉ちゃん』『ほら、見てごらん』『誰の目にも、火を見るよりも明らかじゃないか』」

「副会長の二名のうち、一名の不在、実質二名の不在だがな」

「『これは明白に生徒会則、第2条に違反している』」

「生徒会則第2条、『生徒会執行部は会長・副会長・会計・書記・庶務の六名よりなり』『会長は当選後迅速に他の役職に相応しき者を選定しなければならない』わかりましたか?」

「だ…だが! そんな揚げ足取りみたいな理由で過半数もの署名が集まるわけがない!! よこせ! どうせ、こんなもの捏造に決まっ——」

「!?!」

「署名している生徒が…全員、マイナス十三組…だと!?!」

「『そう』『一年マイナス十三組、二年マイナス十三組、三年マイナス十三組』『三クラスそういんの署名だよ』」

「これが、結果なんだよ。認めるよ、生徒会長」

どうした、もうお終いか。やっぱ、詰まらんこの学園は

第11箱

「名ばかりの署名を集めて過半数か、随分と大した『みんな』だな、球磨川」

「『おいおい』『名ばかりだろうと、人数合わせだろうと、この箱庭学園の誇るべき生徒だぜ』」

「『差別するなよ』『』」

「……………」

「『ちなみに、生徒会が解任される際には役員も諸共だよ』『学校則第45条第七項！』『つまり、高貴ちゃん達もお役御免ってことだ』『今まで、お疲れ様！』『駄目な会長の下でよく頑張ったね、三人とも！』『』」

「『そうだ、そうだ！ 忘れてたよ！ 一年マイナス十三組黒井影斗は今をもって、副会長を辞任する』」

さて、後は空気にでもなって立っておくか

「『無能な先代と違って』『僕はもう役員を全員選定し終えているからさ』『』」

「『僕達が、新生徒会だよ』『』」

立ってるのはいいが、誰か殺さないと落ちつかないな。よし！

襖を殺してイライラをなくそう。

「生徒会戦拳だ。」

「よし、逝こうか！ 襖」

「『字が違うよ』『』」

「『えい☆』」

隠していたナイフで心臓を刺してみたら意外に楽しいね、クセになりそうだよ

「楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな楽しいな！ 愉快的殺し合いを期待しないで待っておく

から」

「この空気は最高だな！ 人殺しは経験してみないと解らないな！

「おい、起きろ！」

「『酷いな、いきなり心臓を刺すなんて』」

「初陣、誰が行くんのだ。実際、俺が行きたいんだが」

「『僕が行くから』 『影斗君は見といてよ』」

「なら、残りの三人は、大事な仕事があるんだ」

「何でしょ？」

「仕事は簡単、庶務戦の間に強化合宿行ってるのを奇襲してきて」

「あんたも、卑怯な人間だね」

「だって、楽に三勝できるじゃん」

「さあ、始めようか！ 楽しいパーティーをね」

まずは、一敗から始めようか！

第12箱（前書き）

過負荷の名前を改変しました

第12箱

「今日は庶務戦だけど、休もうか！ 面倒だし」
寝よう！ 今日寝とこうアイツに用があるし。

「どうしたんだい、こんなに早く会いに来るなんて珍しいな」

「俺が言いたいこと、わかるだろう？」

「なら、幽霊と詐欺師と交換だよ」

「できれば、永遠の病魔も取り替えてくれ」

「それは、無理だね」

「わかってるだろうが、俺の寿命は一年持つか持たないか、厳しい状況だぜ」

「それなら、私の異常を見取ったらいじゃん」

「簡単に言うけど、あれは夢の中だと効果が薄いんだ」

それが、究極の欠点なんだ。

「大丈夫、生徒会戦拳が終わったら来るから」

「今はそれで勘弁してやるよ」

安心院は俺に近づきキスをした。

「これで、戻ったよ。始まりの過負荷、零の世界」
ゼロ・グラビティ

「ありがとう、なじみ」

微笑んで感謝したら安心院の顔が赤くなった。

／／／／／

「どうした？」

「君はもう少し、乙女の気持ちを考えてね」
「？」

訳がわからないな。

「じゃ、また会おうか」

「なんだ、今日はもうお終いか？」

「人吉君が来るからね」

「何か、あったのか？」

「球磨川君に視力を無かった事にされたみたいだよ」

「そうか、お前との話も今日でお終いかな」

「僕は影斗君とまた、話したいな」

「お前がこっちに來たら、話くらい聞いてやるよ」

「約束だよ」

「いいぜ！」

俺はそのまま教室から出た。

「やっぱり、影と君は『ノットイコール悪平等』だね」

第13箱

「どうなったかな、絶望してるかな？　それとも、戦拳する気になつたかな？　ワクワクするな！」

安心院との交渉が早めに終わったため、暇になり学園を散歩中です。

「あんたが、古賀いたみか？」

なんだろう、死亡フラグなことを言ってるのはどこの三下だろう。「なにしてるんだい？」

「球磨川さんの命令で」

「じゃ、代わりに死ね」

俺は周りの奴らの重力を人間が立てないレベルにしたら、骨がミシミシと聞こえたり。内臓が潰れ吐血したりしています。

「ご・め・ん。久しぶりに使ったから手加減できなかった」

まだ、死にきれてないのが三人いた。

「耐えるんだ、凄いな！　あと、2G増やしてもいいかな？　いい

よね♪　どうせ、死ぬんだし」

さらに、重力を増やそうとしたらめだかがきた。

「何をしている」

「何って、ゴミ掃除だよ」

「ゴミだと！　そいつ等はお前の仲間じゃないのか！」

「ゴミはゴミだよ」

「貴様！　いい加減にしろ」

「五月蠅いな！　めだか、お前も、コ・ロ・ス・ゾ！」

早く、後ろのゴミ掃除しよう。

「終わり」

その言葉と共に後ろのゴミは潰れ、血が服にベッタリと付着した。

「許さんぞ！　影斗！」

「許してよ。なかつことにするからさっ！」

「それにね、いたみと遊んでいいのは、俺だけなんだよ！ 他の奴にやらせてたまるか！ 次はお前らも殺すぞ」

電話が鳴ったので嫌々でた。

「『もしもーし、みんなー？』『もう我慢しないでいいよー』」

「そいつ等なら、めだかにやられたぞ」

「携帯、受け取れ」

携帯をめだかに投げ帰ろうとしたらいたみに、話しかけられた。

「ありがとね、影斗君」

「ただ、俺は……なんでもない」

一応、ゴミ共の死はなかったことにした。

「なあ、禊」

「『なんだい？ 影斗君』」

「明日、俺の悪ふざけに付き合ってくれ」

「『なんだい、それは』」

「実は■■■■■やってみないか」

「『いいよ』『楽しそうだし』」

面白いことになってきたな。

第14箱

八月一日、生徒会戦拳二日目――

「皆様、一週間のご無沙汰でございました。それでは、これより生徒会戦拳書記戦を始めさせていただきます存じます」

先に皆さんに、ネタバレします。実は俺と禊は交代してます。変装だけだね。

「前回と同じくまずは、試合の形式を決める運びですが、それに先立ちまして、黒神さま、球磨川さま。少々、前に出てきていただきたい、よろしいでしょうか」

「？」

『？』

一体、何だろうね？

「「！？」」

手錠ですか、禊は一体なにをした。

「……ちょっと待て、これは一体なんの冗談だ？」

「いえ、あなた方は試合後に見境もなく暴れるなど戦拳遂行に支障を来しかねない危険行為が目立ちますので――措置でございます」

『……やめてあげようよ長者原くん』

『僕なんかと繋がれたら、めだかちゃんが可哀相だよ』

「……一向に、構わんわ。貴様の愚行及び愚考を見張るに丁度よい立ち位置だ」

笑えてきたよ、本当にコイツ等、俺こと禊だと思ってやがる。どんだけ、バカなんだよ。

くれぐれも禊、バレる行動をするなよ。

『じゃあさ、もし僕かめだかちゃんが暴れたら、影斗君からのお仕置きはどう』

「わかりました。許可します」

俺にかかれればこれぐらい朝飯前だな。

「そんなこと、許していいのかよ」

「善吉ちゃん、長者原くんを困らせたら駄目じゃないか」

「バカ！　なんでここで善吉ちゃんって呼ぶんだよ！　バレたか。」

「そうだぞ、善吉」

「バレなかった？　よし！　このままたのむぞ襖。」

「影斗、ここにいる奴らもゴミか？」

「ゴミ？　失礼だな、ここに居るのは僕が信頼してる人間しかないな
いよ」

「僕？」

「ならいい」

昨日のことまだ、怒ってるんだ。

「それでは、移動しましょう」

『歩くの嫌だな』

「さっさと、歩かんか」

面倒だ、早く終わらないかな？

第15箱

「『どうしたの、めだかちゃん』 『黙りこくっちゃって』」

「：黙りたくもなるわ。私達は貴様達に勝とうと命懸けで躍起になっておるのに、貴様達は勝ち負けを度外視して嫌がらせみたいな戦法ばかり取って来るのだからな」

「『あーそりゃそうだね』 『でも勝ち負けを度外視してるって決めつけられるのは心外だな』 『こっちはこっちで真剣なんだから』 『よし！』 『じゃあ、こうしよう』」

「『もしも、この試合で飛沫ちゃんが名瀬さんに負けたら』 『僕は、その時点で箱庭学園から手を引くよ』」

テンションが上がってきたな！

「「「「！？」」」」

「『飛沫ちゃんが負けたら、累計二敗で僕達は王手をかけられたも同然』 『テトリスで言えば、ブロックを半分以上積んでしまった状態だ』 『そこから、こまめに一列ずつ消していくなんて、テンション上がんないしねー』」

「球磨川先輩：よろしいんですか？ 選挙管理委員会の前でそんな約束をしてしまえばもう取り消せませんよ？」

「『いーんだよ』 『この約束ばかりはなかったことにしないとここに誓う』 『そんなわけだから飛沫ちゃん』 『がんばってね』 『本来、過負荷に言うような激励じゃないんだけど』 『絶対に勝って』」

さて、ここから先は俺にはわからない。しかし、勝ことは知っているからどっちでもいいけど、本当に早く終わらないかな？

第16箱

やっぱり、面白くないな。早く終わらないかな？

「…おい球磨川、約束を忘れるなよ。このまま志布志一年生がくじ姉に敗れば、貴様は箱庭学園から手を引くのだぞ」

「『……………』約束？」

「『そんなことを気にしている場合じゃないだろ！？』『きみ達は

！』『きみ達は、こんな血生臭い戦いを見てなんとも思わないのかい！？』」

襦のキャラって面白いな、このままでもいいな！

「『こんなのは、戦拳でも何でも無い、ただの殺し合いだよ！』『女の子同士が傷つけあうのを雁首揃えて、眺めているだなんてどうかしているよ』『もういい！』『僕達の負けでいいから！』『早く彼女達をこんな馬鹿げた争いから解放してやってくれえーっ！』『…………』『——』と』『泣いてみてもそろそろ誰も信じてくれなくなったと思うので』『普通にコメントしてあげるね、めだかちゃん——』『飛沫ちゃんは、あんな卑怯者なんか絶対に負けないんだから！』」

暇だな、なんか面白いこと起きないかな、もう詰まらないよ、一様、過負荷も見取れるから見取っていいんだけど『致死武器』いらないんだよね。それに、早くネタ晴らしたいんだよね。

「球磨川、少し頭を借りるぞ」

「『え？』『？』」

頭をそんな風に使うなんて酷いよ、どんなこととして恨みを晴らすうかな？

「名瀬先輩が過負荷を発現させた…いや、作った？ 自身を改造して？ そんなことが可能なのか？？」

「『…………』『怯えてんじゃねーよ、志布志！』『聞けば、そいつの「凍る火柱」はついさっき身につけたばかりね過負荷らしいじゃね

「腕が痛いな、でもこれで痛くない」

一瞬にして無くなった腕がそこにあった。

「では、副会長戦までさようなら」

疲れた、彼に交代しよう。俺の中に眠る魔物にね。

第17箱

世界は詰まらないな。やっぱり、この世界は消した方がいいな。

「恐いこと考えてるね、影斗君」

「飽きたからしょうがない」

「なら、早くそっちに行かないと」

「それまでに、俺が改心したらどうする」

「その時は、こっちに引き込むよ」

「それも楽しそうだ。じゃあ、そのときは頼むよ」

俺は本当に楽しいと思っていた。この時はまだ。

「影斗君の回答は最高だよ」

「何年のお前と話してると思ってたんだ」

「16年だね」

「短いな！」

「そんなことはないよ。僕と影斗君が出会うのは決められていた運命だよ」

「運命か」

「最高の言葉だと思わない？」

「でも、俺は過負荷だぜ」

「大丈夫、僕だけが影斗君の味方だから」

「お前からその言葉を聞いたら、鳥肌がたったぞ」

「酷いな、僕は本気だよ」

「お前の本気は怖いんだよ！」

「いいじゃないか」

「なら、今回は信じてやる」

「ねえ？」

「何だよ！」

「影斗君は僕のこと好きかい？」

「それは、LikeかLoveどっちだ？」

「Loveの方だよ」

「好きだけど、俺は恋をしたくないんだ」

「何でかな？」

「世界が詰まらなくなるから」

「僕といったら詰まらなくはないよ」

「それもいいけど」

正直言っただけにたい。そして、地獄を見てみたい。

駄目だよ！ 君は幸せになる権利はあるんだから」

「なら、証明してくれ」

「僕は影斗君が好きだから、救ってあげるよ」

キスをされた、俺の中の何かが抜けていくのを感じた。

「永遠の病魔を抜いてあげたよ」

「なんの為に？」

「本気の影斗君を見たいから」

「なら、俺の原点が戻ってきたのか？」

「そうだよ、僕と初めて会った時に戻ったんだよ」

「あの時の力が」

「でも、気を付けてそれはあれより強力で酷いから」

「わかってるよ」

俺は無表情になり、理解した。

「戦拳が終わったら直ぐに返してもらおうよ」

「約束する」

俺は安心院の近寄った。

「やっぱり、なじみは最高だ」

「嬉しいよ、君からそんな言葉を聞くなんて」

そして、軽くキスをした。

「これは、お礼だから」

俺は手を振りながら教室を出た。

「僕は絶対に君を僕のものにするならね」

「時間になりましたので。これより、生徒会戦拳副会長戦を執り行
いたく存じます」

「ですが、出馬される黒井さまが来ていないのですがどうなさりま
すか？」

「なら、負けていいよ」

「それで、よろしいのですか？」

「さてよ、誰が負けだ」

そこに現れたのは髪が短く、箱庭学園の制服を着た影斗だった。

「遅いよ、影斗君」

「準備がてこずっただけ」

「頼むよ」

「任せろ、楽しい殺人劇の時間だ。死にたい者は前に出ろ」

第18箱

「じゃ、子にするよ」

「副会長戦の形式は『窮鼠、猫を噛む』に決定いたしました」

「早く移動しよう、時間をもったいない」

「では、ついて来て下さい」

——校舎屋上

「では、ルールを説明致しますと、どちらかが負けを認めたらそこで終了します」

「さて、遊ぼうか。いたみ」

「私は負けないから」

命が勿体無いから早めに終わらせよう。

「終わりです」

「なにが終わりなんだ」

その瞬間いたみは全身に傷ができ、倒れた。

「負けを認めて下さい」

「嫌だ、私は負けを認めない」

「立ち上がった所で済みませんが、もう一回倒れてください
いたみはまた同じように倒れた。

「早く負けを認めて下さい。次は死にますよ」

それでもいたみは立ち上がる。

「私は、影斗君を救うまでは負けを認めない！」

「俺は無駄な攻撃をしたくないんです」

「お前、攻撃なんかしてないだろ！ その証拠に床が……！！」

「床がどうしましたか、善吉」

俺は動いていない訳ではない。

「う、嘘だろ！ 床にヒビが入ってるだど！？」

「教えましょう。これが俺の過負荷『地獄の道』（デスロード）です。」

この過負荷は自分の寿命を減らし、体力、スピード、知能、力といったものが二倍にます物です」

「じゅ、寿命を減らすだと!!」

「そんなの、私は許さない!!」

「何故です?」

「自分の寿命を減らすのを何とも思わないの!」

「どうせ、人間は死ぬんですから」

「自分から減らすなんて駄目だよ!」

「ゲホ、ゲホ、限界が近いですね」

血が出てきたか、本当にこの世界とお別れする日が来るなんて、
どんだけ待ち望んだか。

「死なせない、絶対に死なせないよ」

「死なせたくないのなら、負けを認めて下さい」

「私は影斗君を改心させ、尚且つ死なせない」

「それがどうした! 俺が死んでも誰の迷惑にならないから死んで
いいに決まってる」

「私は認めない! そんな考え方間違ってる!」

「もういいや、長者原君俺のま」逃げるの」

「そうやって逃げてでも幸せにはなれない」

「俺は孤独でいい」

「許さない! それだけは許さない! 孤独なんて悲しい、友達が
いないと寂しいよ」

「五月蠅い! 俺のなにが分かるんだよ!」

「分かるよ」

少しずつ近づいてくるいたみに俺は苛立ち重力をあげた。

「大丈夫、私を信じて」

さらに重力を上げたが近づいてくる。

「来るな! 来ないでくれ!」

俺は抱きしめられた。嫌だ！
頭が回らない、この感情はなに？

「私は影斗君の味方だよ。だって、私は影斗君が好きだから」

「あ、あ……」

「もう大丈夫、影斗君は一人じゃないよ。私がいるから、ずっと一緒にいるから」

何だ！
この胸の痛みはなんなんだ！
これが愛なのか？
この、

[illegible]

「僕は恋をしてもいいのかな？」

「いいよ」

僕の唇が彼女の唇に触れたと共に気を失った。

「返しに来たよ、安心院さん」

「詰まらないな、君は僕が幸せにしたかったのに」

「じゃあ、返したから帰るね」

僕はやっと幸せ（プラス）になれたんだ。

人気投票やらないか。(前書き)

好奇心に負けたZE☆

人気投票やらないか。

私こと餓鬼は人気投票をしてみたいと思いました。

「また、いきなりな」

やってみたかったんだもん。

「続き書こうぜ」

俺の1日の活動時間は5時間なんだ。

「おい、引きこもり」

やつは無視をして、人気投票を開催します。好きなキャラ（この小説に出てきたキャラだけです）に一票だけ入れて下さい！ 一人一票だけですよ。

開催期間は二週間です。皆様の投票をお待ちしています。

「お願いだ！ 作者がゲームにはまる前に終わらせたい」

誰が、ゲームにはまるんだって

「お前だ！」

俺は今からPCゲームするだけじゃないか？

「規制は守ってるよな」

も、もちろんさ（汗）

「嘘だッ！！」

嘘じゃない！

「なぜ、前まで「星空へ架かる橋、最高だ！ 陽菜先輩！」と叫んでいたの誰だ！」

今からするのは買い置きしていたリライトするだけだ！ 文句あるか！

「この通りだ、みんな頼む！ こんなバカな作者の企画に参加してくれ」

人気投票やらないか。(後書き)

皆様の投票、心からお待ちしています m (J m

第19箱（前書き）

人気投票は感想に書いて下さい

第19箱

「皆さんお揃いで、どうしたんだい」

力の使いすぎで身体がボロボロになり入院中です。

「お見舞いだよ」

「お見舞いなら、メロン持って来いよ」

「ふざけるな」

「だって、めだかちゃんはスイカ持ってきたぜ」

「まじかよ」

「生徒会のメンバーで来たってことは、なにかあるのかな☆」

「そうだった、善吉のせいだぞ」

「お、俺のせいだよ！」

「話とはなに」

「副会長になってくれないか」

「いいぜ、なってやるよ。暇だから、退院するか」

「もう大丈夫なのか？」

「はやく帰りたい(汗)」

「なにが有ったんだ、影斗」

「思い出したくもないよ(泣)」

その時、ドアがおもいきり開いた。

「来たよ！ 影斗君」

「悩みの根元が来た！」

「あれ、荷物まとめてるってことは退院するの？」

善吉が小声で話しかけてきた。

「普通じゃねえか」

「見てたら分かるって」

「影斗君、なんで連絡くれなかったの？ 連絡くれたら手伝いに来たのに」

ヤバイ！ この空気どうにかしてくれ！

「二人はどんな関係なんですか？」

喜界島さん！ それ、アウト！

「それはね、「幼馴染み」影斗君！ これなんだ」
いたみの手には印鑑が入ってる入れ物があった。

「そ、それって」

「そう、実印だよ」

「不幸だああああああああ！」

「さあ、これにサインして」

なぜ、婚姻届があるんだよ！

「親の許可がなければ無効だ！」

「大丈夫、影斗君のお母さんに許可取ったから」
人生終わった。

「善吉！ 助けてくれ！」

「幸せになれよ」

「お前は友達だと思ったのに」

「俺はまだ、死にたくないんだ」

善吉が俺の肩を手を置いてそう言って帰ろうとした。

「待って！ みんなお願いだから帰らないで」

「『幸せになってね』『影斗君』」

襖、お前まで裏切るのか！ いや、まだ手段がある。

「なら、生徒会に相談がある！ 助けてくれ」

「「「『断る！』『断る！』『断る！』」」」

全員で断らなくてもいいよね。

「さあ、サインするか愛を確かめるとちがいの？ 影斗君」
少しずつ近づいてくるいたみが怖いと思ったのは、この時が初めてだよ。

「理不尽だああああああああ！」

「サインして」

「嫌だ！」

「じゃあ、愛を確かめよう」

「この小説はR18じゃないです」

「そこは、作者が頑張るから」

「嫌だ！」

「お持ち帰りしていい？」

「駄目だよ古賀さん、影斗君をお持ち帰りするのは僕だ！」
変態が現れた！

「髪切ったから」

「こんな美少年を僕の弟にするのが夢だったんだ」
勢力が二人に増えた！ 終わったな俺

「黒井、見舞いに来たぞ」

「助けて名瀬さん」

「古賀ちゃんも兄貴それぐらいにしろよ」

「しょうがない」

「妹の頼みなら」

助かった！

「じゃあ、四人でどこかに行こうぜ」

そのままファミレスに行きました。名瀬さんありがとう。

「あとで研究の手伝い頼むわ」

今日は厄日でした。

第20箱（前書き）

影斗君は残念な子にクラスチェンジしました。

第20箱

「不幸だあああああああ！」

今、俺は廊下を爆走中です。

「サインして！」

自由になったと思ったのに、なんなんだ！　これは！

「なにやってんだ！」

「雲仙先輩！　匿って下さい！」

良かった！　近くに風紀員会の部屋があつて。

「何があつたんだ？」

「それがですね、先輩——でここまで来たんですよ」

あの日以来、雲仙先輩とは仲良くなりました。

「お前も大変だな」

「はあ、毎日が大変ですよ」

「お茶です」

「ありがとうございます。呼子さん」

不思議だな？　なんで微笑むだけで女性は赤くなるんだ？

「モテる人間は違うねえ」

「モテてないですよ。では、自分は生徒会室に行きます」

「おう、また来いよ」

「分かりました」

やり過ごせたか。この所やバイからな、十三組に移って正解だな

！　違う！　間違いだ！　授業がない＝永遠の鬼ごっこ！　一組に

戻りたい！

「遅くなって、済みません」

何かが俺にぶつかった衝撃がきた。

「会いたかったよ♪　影斗君」

「な、なじみ！」

これは、幻覚ですか？

「『影斗君、夢でも白昼夢でもないよ』」

「夢であって欲しかった!」

「酷いな、僕の愛は本物だよ」

「嫌だ! そんな愛なんか、無効だ!」

「なら、三年間強制留年させるよ」

「理不尽だああああああああ!」

「フラスコ計画には、影斗君も必要だしね」

「なにも言えない」

「影斗! そんなの聞かなくていい」

「影斗君、君は悪平等側こつちなんだから」

「ビビるな! 怯えたらここで、負けだ!

「俺は副会長ですから、話ぐらいは聞いてあげるよ」

「それで許してあげるよ」

「助かった! 俺は助かったんだ!

「強制留年は決定だよ」

「それだけは、勘弁して下さい」

「俺はプライドを捨て、土下座をした。」

「冗談だよ」

「もう嫌だ!

「影斗、隅で泣くなよ」

「帰っていい?」

「めだかちゃんが来るまで耐えろ」

「僕は三年間、そこら辺でケータイでもいじってるよ」

「善吉、俺は三年間休むよ」

「瞳ちゃん、影斗君の心のケアをお願いします」

「もがな、ありがとう。」

「大丈夫だよ。いたみちゃんを直ぐに呼ぶから」

「大丈夫です。元気ですから」

「荒いよ!

「一発だな」

「治っていない！」

「ここにはでしょ。もしかしたら、家にいるかも」

[illegible][illegible]

[illegible]

「影斗！ 戻ってこい！」

善吉から斜め45度のチョップを喰らった。俺はブラウン管テレビじゃない。

「俺はいたい、なにがあつたんだ？」

「なにもなく、平和だったよ」

「そうか、夢か！ 夢なら、早く覚めて！」

「誰でもいいから、めだかちゃん呼んできて」

「俺の日常が平和なんて、有り得ない！」

精神不安定な人間がここにいた。

第21箱（前書き）

オリジナルに入ります

第21箱

「善吉、俺死にたい」

「待て！ 直ぐにめだかちゃんが来るから安心しろ」

「女性って怖いよね」

「安全な人もいるから安心しろ」

「世界なんて崩壊してしまえ。」

「めだかさんを連れてきたぞ」

「阿久根先輩、死んで下さい。」

「安心しろ、影斗の安全は保証する」

「あの時、裏切ったのに？」

「そ、それはだな」

「人間の価値なんてそこら辺の消しゴムと一緒にだ」

「次からは守ってやる」

「約束だよ」

「約束する」

「ほら善吉、めだかちゃんに報告があるんだろ？ さっさとしろよ」
(変わり身早い！)

「さっき、影斗が言ったみたいにあいつの視界の中では、俺や球磨川とそこら辺の消しゴムが同じ値打ちしか持っていなかった」

「しょうがない、なじみは平等にしか見ないから人間をね」

「でも」

「善吉が一度、俺を見た。」

「影斗だけは、特別に見ていた」

「本気で言っているのか、善吉よ」

「本当だ、影斗一ついいか？」

「一つとは言わず二つでも三つでも聞け」

「あいつとはいつから知り合った？」

「『僕もそれが聞きたかった』」

「0歳の時から知り合いだよ」

「本当なのか」

「いつも、夢の中に現れるけど？」

「だから、フラスコ計画を知っていたのか」

「考えたのはなじみだけど、俺は未来を見たから助言しただけだよ。完璧な人材が生徒会長になるって」

「じゃあ、影斗は今までの戦いを知っていたのか？」

「正解」

「なんで止めなかった」

善吉が胸ぐらを掴んでくる。

「めだかちゃんの経験値増大のため。面白かっただろ？ お陰で善

吉は異常をレンタルできた」

「ふざけるな！」

「ふざけてない、それにあんたらのメンタルだって強化できた」

盛大に笑ってやった。

「可笑しな人達だ」

めだかちゃんに殴られた。

「影斗、貴様と言う人間は」

「『止めなよめだかちゃん』」

「何故、止める球磨川」

「『勘違いしてるよ』『この時の為に僕等を鍛えていたんだよ』」

「さてと、俺は帰るよ。やっぱり、此処には俺の居場所はないみたいだしさ」

「『それで良いのかい？』」

「だって、俺は異常で過負荷で悪平等な人間だからね。だから、敵でも味方でもないただの傍観者だよ」

「やはり、影斗を一度ど粛正する義務があるな」

「はは、やってみなよ」

「明日、グラウンドに來い」

「暇だから今すぐ始めよう」

威嚇に暗器を披露した。

「なら、今すぐに準備を始めるぞ」

「生徒会5人対俺一人でやろうか」

「いや、私一人で十分だ」

「一人は止めた方が身のためだ」

「なら二対一だ」

「てか、めだかちゃんを殺せばお終いだし」
「始めようか、本物の遊びをね。」

第22箱

「本気で来ないと死ぬよ」

戦闘体制をとった。

「何だよその構え！」

「知ってるだろ。光化静翔だ」

「ふざけるのもいい加減にしろ」

善吉が吠えているが余りにも醜い。

「フルコーラス」

速度の速い攻撃が善吉に当たっただけだった。

「避けるよ」

「善吉！」

「大丈夫！ ただ攻撃が当たっただけだ」

「善吉の『欲視力』は封じさせてもらった」

「本当なのか、善吉」

「ああ、あいつは自分の視力がないが正しいけど」

「こいよ、俺を粛正するんだろ」

「そうだな、言葉通り粛正してやろう」

「俺に攻撃を当てても無駄だ」

視力を消して周りが見えないが今の俺は殴られているだけ（・・・）。

「さて、反撃を始めるよ」

俺は視力を戻し、ただ善吉を見た。

「！？」

「どうしたんだ、善吉？」

「影斗、お前」

「足りなかったか」

「ぐっ！」

「痛すぎて声が出ないのかな？」

「影斗！」

また、拳の威力が重くなってきた。

「痛いな、攻撃用の異常がないな」

「嘘を付け、過負荷も使っているだろ」

「バレた！　でもさあ、善吉が死んじゃうよ」

「！？」

後ろを向いたためだかの目に映ったのは地面に倒れ込んでいる善吉だった。

「笑えるよ！　君達は命がいららないの？」

「まず、一人」

「かげとおおおおお！」

「おもしろい」

攻撃を避けるだけはとても退屈だ。

「知ってる？　『完成』は『究極』には勝てない、この意味わかる」
わからない顔をしている。これは、とても面白い。

「最後に一つ、最後の敵は普通だよ」

鳩尾に五発、力をこめ蹴りをくり出した。

「気絶しちゃた」

よし、みんなの二時間前からの記憶を全てなかったことにしよう。
その前に、グランドを直さないと、本当手加減してほしかったよ！

「異常なし」

明日もいつも通りに風紀委員会に顔をだそうかな？　暇はなくなるからいいんだけど生徒会は面倒くさいな。

影斗はなににもなかったかのように帰宅した。本当に学園はなににもなかった、記憶の操作これでいつも通りになる。ただ一人を除いて、安心院なじみを除いて。

「影斗君は面白いな」

彼女の眩きは夕方の闇に消えていった。

第23箱（前書き）

短いです

第23箱

翌日、俺は死よりも恐ろしいおにごっこをしている。

「諦めて下さい！」

「嫌だよ！ 私は諦めない！」

セリフは格好のにいたみの手にある実印と婚姻届を見ると恐怖しかない。

「自由を勝ち取ってやる！」

あともう少し風紀委員会室に着く。

「今日は諦めないよ」

笑顔で追いかけてくると恐怖しかない。

「ここが、使いどころだ！」

『知られざる英雄』を発動した。

「あれ、私誰追いかけていたのかな？」

いたみは俺の事を忘れどこかに去っていった。

「危ない、危ない。俺の安全地帯を知られるのはいけない」

能力を解き風紀委員会室に入った。

「失礼します」

風紀委員会室には雲仙先輩と女性メンバーしかいなかった。

「お疲れだな、影斗」

雲仙先輩がケラケラ笑いながら言った。

「今日は一段と疲れましたよ」

溜め息をしながら雲仙先輩の前に座ったが、この人が一番風紀が乱れていると思うのは俺だけか。

「今日はどこから、鬼ごっこしてきたんだ」

にやけなが話を聞いてくる。

「家から出たら待ち伏せされていました」

「今日は一段とお疲れだな。だがな、ここに来た以上俺と遊んでもらうぜ」

「いつものことですから、慣れました」

「その後も遊びと苦労話をしていると、生徒会の時間になった。」

「では、生徒会に行きますね」

「頑張れよ」

女性メンバーに挨拶をしてグラウンドに向かった。

第24箱

「遅れました」

「遅いぞ」

言葉を返したためだかちゃんは本当に昨日の事を忘れていた。

「なんせ、死より怖い鬼ごっこをしていたもんで」

「ああ、そうだな」

僕の笑顔に顔を青くしている。

「さておき、まあ盛況なのはよいことだが。しかし、冷やかして参加されるのも困りものだ」

「じゃあその役、僕ら副会長に任せてくれよ」

その発言で他の役員が驚いている。

「『そうだね、僕らに任せなよ』」

「だがな！」

「汚れ役は、僕らに任せなよ♪」

笑いながらめだかちゃんの肩に手を置いた。

「顔が笑っていないぞ」

めだかちゃんは顔を青くしながら呟く。

「だから、ま・か・せ・ろ♪」

「わ、分かった。任せる」

力づくに賛成させた。

「「「(ただの、脅しだ!)」」」

三人は心の中で叫んだ。

「さて、日頃の……仕事するか」

「「「(まさかの、ストレス発散!)」」」

台に登った球磨川から挨拶をした。

「『え——』『モブキャラのみなさんこんにちは。』」

「なに言ってるんだ禊」

「「「(フォローがくるのか!)」」」

小さな希望を影斗に賭けた生徒会の三人だった。

「誰もいないじゃあないか」

目の前の大勢の生徒はその場に倒れ込んだ。

「「（六百人の心をへし折った——っ！）」「」」

「誰もいない」

「『どうしました、個性的なきみなさん！』」

「誰に喋ってるんですか」

「『怪我はありませんか。その他大勢のみなさん！』」

「帰っていいですか？」

「『気分が悪いのなら、早く帰った方がいいですよ。もう出番のな
いみなさん——』」

ドガァ！ めだかちゃんの蹴りが当たり、僕は顔面を殴られた。

「球磨川ああああっ！ 影斗おおおっ！ 貴様等、馬鹿か！？」

馬鹿か！？ 馬鹿なのか！？ 私ともう一回一から戦い直したい

か貴様等は！？」

僕らの胸ぐらを掴みながら説教をされた。

「『や！』『違う違う違う！？』『』」

焦る襦に対して影斗は

「やる気？」

挑発していた。

「『大丈夫！』『ちゃんと手加減した！？』『』」

「僕は一割だけどね♪」

まだ挑発を止めていなかった。

「『ほ』『ほら、その証拠に』『ちゃんと何人か残ってるでしょ？』『』」

襦の言葉にグランドを見ながら呟いた。

「残ってる？ 何を馬鹿なことを、貴様等の過負荷に耐えられる中

学生などいるわけが——」

グランドの屍達の一番後ろに、五人立って……

「平伏せ（ヒレフセ）。」

いなかった。否、さっきまでたっていたが地面に平伏せた。

「影斗おおおっ！」

「あは♪」

その瞬間に殴られ気絶した。

第25箱（前書き）

勝手ながら、この話でこのものを語りを終わらせてもらいます。

第25箱

「さて、今日はこれぐらいにして帰るか」
俺はカバンを持ち帰路についた。

「明日からは楽しい日々になりそうだな」

この時まで俺はこんな事態になるとは今でも予想をしていなかった。

「死ね!!」

俺は声のする方に向くと刃物を持った、少年に心臓を刺された。

「これで、時間の流れは安定する」

「なにが、安定するんだ？」

「う、嘘だろ！」

少年の前には刃物が心臓に刺さった影斗が立っていた。

「痛いな」

「心臓を刺したのに何で、生きている！」

「正解は心臓を右側に移動させたから生きています。でも、この傷は深いから少し危ないな？」

「バカな！」

少年は化け物を見るような目でずっと、影斗を見ている。

「俺を殺したいのなら、針のムシロ（アイアンメイデン）を持って来いよ！」

「なら、そうするよ」

不意に聞こえてきたのはなじみの声だった。

「やっぱり、お前の差しがねか」

影斗は顔以外は全て針によって拘束されている。

「君には必要な時まで寝ていて欲しいんだ、僕の傍でね」

「嫌だね！」

体が痛い、出血の量は死のレベルを越えている。

「それはできないよ。だって、僕は君の事が好きだからね、普通の

君がね（・・・・・・・・）」

影斗の唇は安心院の唇によりふさがれた。

「確かに、貰ったよ。影斗君の異常をね」

「ふ…ざ…ける…な」

普通に帰った俺にはなににもできない。

「お休み、影斗君」

俺の唇はまた塞がれ意識を手放した。

「影斗君と僕のファーストキスは血の味がしたよ。楽しかったよ」
このあと、影斗は一生目を覚ます事はなかった。

第25箱（後書き）

自分でこの小説を読んでいたら、自分は何がしたいのか解らなくなり、このように終わらせて貰うことをここで謝罪します。済みませんでしたm（| |）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0911v/>

病弱な異常者

2011年8月29日03時13分発行